

フランス第二共和政期における「教育の自由」をめぐる議論 ——ヴィクトル・ユゴーによるファルー法反対演説 (2)

Débat sur la liberté de l'enseignement sous la Deuxième République :
Discours de Victor Hugo contre la « loi Falloux » (2)

数 森 寛 子

KAZUMORI Hiroko

L'invention hugolienne d'un nouveau style de discours à l'assemblée lui a permis de développer d'une manière plus libre sa pensée sur un problème social, sa vision sur un idéal de société, voire, sa philosophie. Son discours contre la « loi Falloux », à la fois prévoyant et très provocateur à cette époque, s'adresse plus aux lecteurs des journaux qu'aux membres de l'assemblée sous la Deuxième République. L'idée de laïcité déclarée dans ce discours en 1850 semble provenir directement de son discours sur l'« Affaire de Rome » en 1849 ; chez Hugo, l'enseignement par l'État, gratuit et obligatoire, est considéré comme une base essentielle pour la sécularisation et la nationalité. Dès lors, l'enseignement devient un des thèmes le plus important dans la pensée de Hugo, qui sera développé plus tard dans *William Shakespeare* en 1864. Notre essai contient une traduction de la dernière moitié de son discours, intitulé « La liberté de l'enseignement ».

はじめに

1848年の2月革命を経て成立したフランス第二共和政は、1851年12月、当時の大統領であったルイ・ナポレオンのクーデタをもって終了する。このわずか数年の間に、フランスにおいては、教育の制度改革をめぐる、180度その方針が転換されることになった。歴史を振り返るならば、第二共和政期の議会は、当初、穏健的な共和主義に歩調を合わせてはいたものの、1848年の6月暴動をきっかけとして、急速に保守化して行くことになる。臨時政府のもとで、宗教・公教育大臣のイポリット・カルノーは国家による公教育の無償・義務化を盛り込んだ法案を提出していたが、12月の選挙で大統領に当選したルイ・ナポレオンは、同ポストに王党派のアルフレッド・ド・ファルーを任命。彼が新たに提出し、可決された法案は「ファルー法」として知られている。共和国の担い手を国家によって教育するという方針のもと提出されたカルノーの法案に対し、「ファルー法」は聖職者に対して広く教育職の門戸を開き、その教育に対する影響力の拡大を企図する内容であった。宗教教育による暴動の抑止のために、またルイ・ナポレオンが選挙にあたって協力を頼んだカトリッ

ク関係者に対する約束の一つとして、宗教教育を優遇するという方針転換がなされたのである。

これに対して、ヴィクトル・ユゴーは激しい口調で歴史に残る反対演説を行い、それは現在のフランスのライシテ（政教分離）の先駆けとなる思想として、今日でもしばしば引用されるものとなっている。本稿では、日本語訳の存在しないこの演説の、後半部分を翻訳しながら、時代背景やユゴーの政治的立ち位置にも目を向けてみたい¹。

1. ユゴーの演説の特徴

ヴィクトル・ユゴーが1851年1月15日に行った演説は『教育の自由』と題されている。様々な「自由」を擁護するという姿勢を取り続けているユゴーであるが、ここでの「教育の自由」とは、宗教組織、とりわけイエズス会が自由に教育を行う権利を指すものであり、この演説は、その権利拡大を企図した「ファルー法」に反対するというユゴーの立場を反映したものである。この演説は、特にその後半部において、非常に挑発的な内容、表現を含んでいる。そのインパクトは想像しにくいかもしれないが、当時フランスの議会演説には、ある種の決まりきった懇篤な文体が存在しており、たとえ反対演説であっても、これから見ていくユゴーの演説のように、半ば喧嘩腰の文体などはまぎらざるありえないものであったことを確認しておきたい。

1848年に始まる憲法制定議会における演説から、すでにユゴーの演説は作家特有の口調を持っていたと言えるが、彼が新しい演説の文体を発明したのは、1849年7月9日、立法議会における『悲惨について』という演説であったことが指摘されている²。6月暴動以降、極端に右傾化した議会の中で、またさらに大統領となったルイ・ナポレオンのもとでは、何らかの政策決定に対する反対を通すことは不可能な状態にあった。そこでユゴーは、議会の外、すなわち、民衆に対して呼びかけることを選択したのである。議会での演説とやり取りは、すべて翌日の新聞記事に掲載されたから、反対演説が直接的に政治的な有効性を持つことがなかったとしても、議会におけるユゴーと保守派との激しい応酬は、新聞の読者の目に触れるものとなったのである。ユゴーの演説において、非常に先見的なライシテの思想が表明され得たのも、こうした議会の状況が影響していたはずである。議会における駆け引きを放棄し、政治的な有効性を完全に断念することによって、ユゴーは自由にその思想を表明することができたのだ。

¹ 本稿は、愛知県立芸術大学紀要44号(2014年)に掲載された論文「フランス第二共和政期における「教育の自由」をめぐる議論—ヴィクトル・ユゴーによるファルー法反対演説(1)」(p.19—30)に続くものである。

² Guy Rosa, « "Lord Clown", ou comment Victor Hugo devient un orateur républicain », dans Christophe Charle, Jacqueline Lalouette, Michel Pigenet et Anne-Marie Sohn [dir.], *La France démocratique (combats, mentalités, symboles). Hommages offerts à Maurice Agulhon*, Paris, Publications de la Sorbonne, 1998, p. 335-342.

II. 政教分離と公教育

ユゴーにおけるライシテの思想の源泉を画定しようとするならば、膨大な資料にあたる必要がある。一方で、この演説『教育の自由』に現れる「教会は教会に、国家は国家に」という政教分離の明確な宣言については、かなり直接的に、その関連性を、1849年10月19日に行われた『ローマ問題』と題された演説に見て取ることができる。詳細に立ち入ることはできないが、当時イタリアでは、ローマ共和国の独立運動に対して、フランス軍の介入がなされていた。最初、ローマへの派兵に賛成していたユゴーであったが、ルイ・ナポレオンの政策の転換に伴い、演説の中でのユゴーは、派兵が当初の目的から逸脱していることを指摘し、フランス政府の方針を修正すべきであるとする立場をとるにいたっている。

注目すべきは、ユゴーがここではっきりと、「教皇の政府 (gouvernement pontifical)」と「教権擁護派の政府 (gouvernement clérical)」を区別している点であろう。そして、教皇庁とローマとの和解を主張する彼は、「反動政治に執拗なまでに熱を上げ、最も盲目的で、最も陰気であり、最も恩知らずな精神によって息づいている、この教権擁護派の権力が、寛大な心と堅実な人間たちを傷つけ、教皇と教皇庁の知的な仲間たちを不安に陥れたのだ。」と断じている。その上でユゴーは、教皇に対する要求を明らかにし、「教皇庁はイタリアにとって大切なこの2つの旗を大きく掲げるべきである。それは、非宗教化と国民の自由解放だ (Sécularisation et nationalité)。」と述べるのである。イタリアの場合においても、フランスの場合においても、ユゴーはこの時代には、カトリックを真っ向から否定するようなことはしていない。両者の場合に共通して、彼は、あくまでも、宗教と政治とを癒着させることでその権力を拡大しようとする教権擁護派を断罪しているのである。

演説『教育の自由』の中には、イタリアへの言及が見られるが、それはこの「ローマ問題」に直結した指摘となっている。ユゴーは、かつて繁栄を極めたイタリアの凋落と、19世紀という現代にそれがおかれた苦境の原因を、時代錯誤的な宗教教育にあると主張するのである。以降、この演説の後半部を訳出しておきたい。

III. 『教育の自由』後半部

議会はすでにはっきりとなぜ私がこの法案を却下するのかおわかりでしょう。しかし、最後までご説明したいと思います。

皆さん、私がいましがた指摘したように、この法案は、政治的意図に基づく法案である以上に、それよりも悪いもの、こう言ってよければ、戦略的に作られた法案なのです。(ささやき声が起こる。)

私は、敬うべきラングル司教に対して、こうした言葉を発しているのでは断じてありません。この中にいる誰か特定の人物に対してでもありません。私は、たとえこの法案を起草していないとしても、少なくともそれを示唆した一派であり、精彩を欠いていながらも熱烈な一派である、教権擁護派に対して言っているのです。私はこの一派が政府の中に存在しているのか、議会の中に存在し

ているのか知りません。(ざわめき)しかし、私は、ほとんどいたるところにこの一派の存在を感じるので。(新たなざわめき)この一派は敏感な耳をしているので、私の言っていることが聞こえることでしょう。(人々は笑う。)したがって私は、教権擁護派に対して話しをし、このように言いたいと思います。この法律はあなたがたのための法律だ。いいですか、率直に言って、私はあなたがたを信用していません。教育すること、それは建設することです。(センセーション)私はあなたがたが建設するものを信用できないのです。(いいぞ!いいぞ!)

私はあなたがたに若者の教育を託したくはありません。子供たちの魂、人生に向かって開花する新しい知性の発展、新しい世代の精神、すなわちフランスの未来を、あなたがたに託したくはないのです。なぜなら、あなたがたにそれを託すことは、あなたがたにそれを引き渡すことに等しいからです。(ざわめき)

新しい世代が、我々の世代にとってかわることだけでは足りません。我々がなしたことを引き継いで欲しいのです。こうした理由によって、私はあなたがたの手を借りることも、あなたがたが新しい世代に息を吹きかけることも望まないのです。わたしは、私たちの父親たちによってなされたことが、あなたがたによって解体されてしまうことを望みません。彼らによる栄光の後に、このような恥辱は望まないのです。(長引くざわめき)

あなたがたの法律は仮面をつけた法律です。(ブラヴォー!)

それは言っていることは、別のものを作り出すのです。それは自由という見せかけをまとった、隷属を強いるための思想です。寄付と銘打たれた没収です。受け入れることはできません。(左派の席で拍手が起こる。)

これがあなたがたのいつものやり口です。鎖を鍛えている時に、あなたがたは、ここに自由がある!と言うのです。ある人物を追放しながら、あなたがたは、これは罪の許しである!と叫ぶのです。(新たな拍手が起こる。)

ああ!私は、寄生木と樗の木を混同しないのと同様に、あなたがたを教会と混同したくはありません。あなたがたは教会に寄生するものです。あなたがたは、教会の病巣です。(人々は笑う。)イグナチオはキリストの敵なのです。(左派の席で熱烈な賛成)あなたがたは、信者ではなく、自分たちが理解していない宗教の党派主義者なのです。あなたがたは、聖性の演出家なのです。あなたがたの事柄に、あなたがたの術策に、戦略に、あなたがたの主義に、野心に、教会を巻き込まないでください。召使にするために、教会を母などと呼ばないでください。政治を教えてやるのだという口実で教会を苛まないでください。とりわけ、それをあなたがたと同一のものとはしないでください。あなたがたが教会に対してなした過ちを認めなさい。ラングル司教はあなたがたにそう言ったのです。(人々は笑う。)

教会があなたがたに関わるようになってからどれほど衰えてしまったか御覧なさい。あなたがたが嫌われているがために、ついには教会が憎まれることになるでしょう。本当に、あなたがたに言っておきますが(笑いが起こる。)³、教会はあなたがたなしで十分にやっつけられるのです。教会を休ませてあげなさい。あなたがたがそこからいなくなれば、人々は教会にもどってくるでしょう。こ

の敬うべき教会を、そっとしておきなさい、この敬うべき母を、その孤独の中に、その献身の中に、謙虚さの中に。これらすべてが教会の偉大さを作り上げているのです。その孤独が群集を惹きつけ、その献身は力であり、謙虚さはその威厳なのです。(熱烈な賛同)

あなたがたが宗教教育について話す！何が本当の宗教教育であるか、その前にあっては沈黙し、それを乱してはならないような本当の宗教教育をご存知ですか？それは瀕死のものを看護する慈善の修道女。それは奴隷を買い取るメルシー会の修道士。それは捨て子を拾うヴァンサン・ド・ポール。それはペスト患者のただなかに立つマルセイユの司教。それはパリの大司教、微笑みながら、フォーブール・サンタントワヌに向かって語りかけ、内乱の上に自らの十字架を掲げ、平和をもたらすことさえできれば、死をも恐れなかった、あの司教です。(ブラヴォー！)これこそが、真の宗教教育、現実的であり、奥深く、有効な、民衆に受け入れられる宗教教育であり、それは宗教と人類のために、あなたがたが追い払ってしまったキリスト教徒を、より多く作りだすのです。(左派の席で長い拍手が起こる。)

ああ！私たちはあなたがたを知っています！私たちは、教権擁護派を知っているのです。それはいまだに活動している古い一派です。(笑いが起こる。)教義の扉の上に見張りを登らせるのはこの一派です。(笑いが起こる。)真実のために、二つのすばらしき状態、すなわち無知と誤謬というものを見つけたのは、この一派なのです。学問と才能に、祈祷書を越えたところまで進むことを禁じ、思想を教義の中に閉じ込めたがるのです。ヨーロッパの知性の歩みのすべては、この一派の意に反してなされたものなのです。教会の歴史は、進歩の歴史の中に記されています、しかしそれは、その裏側に書かれているのです。(センセーション)この一派は、すべてに対して反対するのです。(人々は笑う。)

星が落ちてくることはないと言ったがために、プリネリを鞭打たせたのは、この教権擁護派なのです。世界の数は無限であり、創造の神秘を垣間見た、と断言したことで、カンパネラを27回も拷問にかけたのは、この一派なのです。血液が循環していることを証明したがゆえに、ハーヴィを迫害したのは、この一派なのです。それは、ヨシュアの名においてガリレオを閉じ込め、聖ポールの名において、クリストファー・コロンブスを投獄したのです。(センセーション)天の法則を発見することは冒瀆であり、大陸を見つけることは異端だったのです。宗教の名の下に、パスカルを破門にし、道徳の名の下に、モンテーニュを、道徳と宗教の名の下に、モリエールを破門にしたのは、この一派なのです。おお！そうですとも、確かに、あなたがたが誰であろうと、カトリック派を名乗る者であり、実際には教権擁護派であるあなたがた、私たちはあなたがたを見知っているのです。もうすでに長らく、人間の良心はあなたがたに反旗を翻し、次のように問うている。私にどうしろというのですか、と。もうすでに長らく、あなたがたは人間精神に響をはめようとしているのです。(左派の席で賛同が起こる。)

³ 聴衆の間で笑いが起こるのは、ユゴーがここで、聖書の言い回し(原文は« En vérité, je vous le dis »)を取り入れているためであると考えられる。

そんなあなたがたが、教育の指導者になりたがるとは！あなたがたは、どんな詩人も、作家も、哲学者も、思想家も、一人たりとて受け入れようとはしないというのに！それに、天才たちによって、書かれたこと、見出されたこと、夢想されたこと、演繹されたこと、閃かれたこと、想像されたこと、発明されたこと、つまり文明の貴重な宝、世代から世代へと何世紀も受け継がれる遺産、知性の共有遺産を、あなたがたは拒絶するのです！もし人類の頭脳があなたがたの目の前にあり、あなたがたの裁量に任せられ、書物のページのように開かれたならば、あなたがたはそこに書かれたことを抹消してしまうでしょう！（そうだ！そうだ！）このことを認めなさい！（長い間ざわめきが続く。）

ついには、ひとつの書物があります。それは、イスラム主義にとってのコーランのように、宇宙のための書物であり、インド人にとってのヴェーダのように、あらゆる聖なる知によって照らされた人間の知のすべてを含み、人々の崇拜が大文字ではじまる唯一無二の書物と呼ぶところの聖書です！なんということか！あなたがたの検閲はそこにまで及んでいるのです！驚くべきことです！何人もの教皇が聖書を禁止したのです！神の書物がローマによって禁書にされるのを見るのは、分別のある者たちにとっていかなる驚愕、純朴な心にとって、いかなる恐怖であることか！（左派の席で熱烈な賛同）

それなのにあなたがたは教育の自由を要求する！いいですか、率直にいきましょう、あなたがたが要求する自由について、理解し合おうではありませんか。それは、教育しないという自由なのです。（左派の席で拍手が起こる。—右派の席で激しい抗議が起こる。）

ああ！教育すべき民衆をあなたがたに与えよというのですか！よいでしょう。—あなたがたの生徒を御覧なさい。あなたがたのなしたことを。（人々は笑う。）あなたがたは、イタリアに何をしました？スペインに何をしましたか？あなたがたが、最も栄える国々の中でも抜きん出たこの二つの大国を、その手中に収め、意のままにし、指導下におき、厳格な監督下においてから何世紀かの間に、これらに一体、何をしたのか？（ざわめきが起る。）

それを言って差し上げましょう。ものを考える人間なら誰でも、親を思う子が抱く得も言えぬ苦痛を持ってその名を発するイタリア、数々の天才と諸国の母であるイタリア、詩と芸術の輝かしい傑作を世界中に広め、人類に読むことを教えたイタリア、しかし、あなたがたのおかげで、今日のイタリアは読むことを知らないのです！（深いセンセーション）

そうです、イタリアはヨーロッパのすべての国家の中で、自国生まれの識字者がもっとも少ない国なのです。（右派の席で抗議—乱暴な大声が飛び交う。）

すばらしい持参金を持ったスペイン、ローマ人から第一の文明を受け取り、つぎにアラブ人から第二の文明を受けとり、神の摂理によって、あなたがたの意に反して、アメリカという一つの世界を受け取ったスペイン。そのスペインはあなたがたのおかげで、あなたがたの愚鈍にさせる首かせ、衰退させ矮小なものにしてしまう首かせのせいで（左派の席で拍手）、ローマ人から受け継いでいた権力の秘技を失い、アラブ人から受け継いでいた芸術の才を失い、神からいただいていた世界を失い、あなたがたがスペインから失わせたすべてのものの代わりに、スペインはあなたがたから異端審問を受け取ったのです。（ざわめきが起る。）

異端審問、この一派に属する者の中には、今日それを恐る恐る復活させようと企てている者がいるのです。その遠回しな態度を私はお褒めいたします。(左派の席で長い哄笑が起こる—右派の席で抗議が起こる。) 異端審問、それは500万人の人間を、薪の上で焼き殺し、あるいは牢獄の中で窒息死させたのです！(右派の席で否定の声があがる。) 歴史をお読みなさい！異端審問、それは異端者として火炙りに掛けるために、死者を掘り起こしたのです(それは本当だ！)、ユーゲルと、フォーカルキエの伯爵であるアルノーがそれを証言しています。異端審問、それは異端者の子供、第二の世代を、不名誉で公共のいかなる敬意も受けることのできないものとして告発していました。実際の判決の言葉でいうところの「自らの父親を告発したとされる者」だけを除いてです。(長いざわめき) 異端審問、それは、私が今こうして話している間にも、バチカンの図書館の中でガリレオの草稿を、禁書として、閉じ込め、封印しているのです。(動揺が起こる。) あなたがたが奪い、そして与えたものから、スペインを慰めるために、あなたがたはそれに大文字のカトリックと名づけたのです。(右派の席で不平のささやきが起こる。)

ああ！ご存知でしょうか？あなたがたが、スペインの偉大な人物の一人が発した、あなたがたを非難する苦しみに満ちた声を奪いとってしまいました。その言葉とは「私はスペインが《カトリック》であるよりも《偉大》であることを望む！」というものです。(右派の席でどなり声が起こる。長い中断。一人も議員が演説者に乱暴に言葉をぶつける。)

これぞ傑作というものです！わたしたちがイタリアと呼んでいた文明の炎をあなたがたは消してしまいました。私たちがスペインと呼んでいた巨人、あなたがたはそのあちこちに穴を穿てしまいました。一方は灰となり、もう一方は廃墟となっています。これこそが、あなたがたが、二つの偉大なる国民に対してなしたことなのです。そしてフランスをどうしようというのですか？(ざわめきが長く続く。)

さて、あなたがたはローマからやってきました。大変結構なことです。あちらでは、大層な成功をなされたわけですから！(左派の席で、笑いブラヴォーの声) あなたがたはローマの民に口輪をはめてきたというわけです。そして今から、あなたがたはフランスの民に口輪をはめたがっている。そうでしょう、それはさらにもっとすばらしいことで、ぜひともそうしたいことでしょう。ただし、気をつけなさい。それは容易なことではありません。こちらは、完全に生きたライオンなのですから。(動揺が起こる。)

あなたがたは何に対して恨みをもっているのか？言ってさしあげましょう。あなたがたは人間の理性に対して恨みを抱いているのです。なぜか？なぜならばそれは光をもたらすからです。(そうだ！そうだ！—ちがうぞ！ちがうぞ！)

そうです、何があなたがたの迷惑であるのか、言って差し上げましょうか？それはこのフランスが3世紀来発している、膨大な量の自由の光、フランス国民をして世界を照らす国民とし、世界中のすべての民衆の上にフランスの明晰さが感知されるようにした光なのです。(センセーション) このフランスの明晰さ、この自由な光、ローマから来るものではなく、神のもとから来る光、これこそ、あなたがたが消そうと目論んでいるもの、そして私たちが守りぬこうとしているものなのです。(そ

うだ！ そうだ！ —左派の席でブラヴォーの声)

私はあなたがたの法律を却下いたします。なぜならばそれは、初等教育を奪い取り、高等教育を退廃させ、学問の水準を下げ、祖国の力を減じてしまうからです。(センセーション)

私がそれを却下します。なぜならば、私は、何らかの理由によって、フランスが縮小されるたびに、心を締め付けられ、顔を赤らめる者の一人だからです。それが、1815年の協定でなされたような、領土の縮小であれ、あなたがたの法律による、知性の偉大さの縮小であれです。(左派の席で熱烈な拍手が起こる。)

皆さん、最後に、私にこの演壇の上から、教権擁護派に対して、私たちを侵略しようとしている一派に対して(聞きなさい！聞きなさい！)、重大な忠告をすることをお許しください。(右派の席で不平の囁き声)

この一派は巧妙なやり口に事欠きません。状況が助けるならば、それは強く、とても強く、強すぎるのです！(ざわめきが起こる。)それは国家を混ぜあわせの嘆かわしい状態に保持する方法を知っているのです、それは、死ではなく、しかし生でもないような状態です(その通り！)そして彼らは、その状態を統治と呼ぶのです。(笑い)

それは、昏睡状態に置くことによって統治するという方法なのです。(人々は笑う。)しかし、気をつけなさい、このようなものはフランスには適していないのです。このフランスに対して、次のような理想を垣間見せること、ただ垣間見せることだけでも、それは恐るべき行為なのです。すなわち、至上権を有する教会、裏切られた自由、打ち負かされ拘束された知性、破かれた書物、新聞にとってかわる司祭の説教、僧衣の闇によって精神にもたらされた夜、そして聖堂の番人によって抑えつけられた才能！(左派の席で賛同—右派の席で怒りに満ちた否定)

これは本当のことです、教権擁護派は術策に長けています。しかし、この一派が世間知らずであることに変わりはありません。(哄笑)何ということか！この一派は社会主義を危惧するのです！そして何とまあ！その言うところによれば、波がせり上がってくるのを目にし、その上げ潮に対して、波の力を減じるための何らかの柵を築こうというのです！この一派は、波がせり上がってくるのを目にし、その波から社会を守るために、社会的偽善と物質的な抵抗を組み合わせるならば、そして軍隊のないところはどこにでも、イエズス会を置いてしまえば、社会は救われるであろうと想像するのです。(笑い)と喝采)なんと哀れな！

繰り返しますが、ご用心なさい、19世紀は教権擁護派に対して逆の立場をとっているのです。意固地にならず、深く新たな直感に満ちたこの偉大なる時代を抑えつけようとするのを諦めなさい。さもなければ、この時代を怒らせることにしかならず、私たちの時代の恐るべき側面を不用心に発展させることになり、ひどい事態を出現させることになるでしょう。そうです、強調しておきたいと思いますが、聖職者による教育と告解室による統治を生み出すこのシステムによってです！(長い中断。叫び声。静粛に！何人もの右派の議員が立ち上がる。議長とヴィクトル・ユゴーは私たちのところまでは聞こえてこない対話を交わす。甚だしい喧騒。演説者は、右派の席に向かって、再び話を始める。)

皆さん、あなたがたは、教育の自由を強く求めるとおっしゃいました。それならば、少し討論の自由も求めるようにしてください。(人々は笑う。喧騒が収まる。)

彼らの主義主張とは、柔軟性のない宿命的な論理が、すべての人間の意に反して導き出し、悪のために実を結ぶものであり、こうした、歴史においてそれを観察するならば恐怖を催させるような彼らの主義主張とともにあっては…(新たな抗議の叫び声。静粛に！演説者は話を遮られながら)

皆さん、教権擁護派は、すでに申し上げましたように、私たちの間にはびこっているのです。私はそれと戦い、この一派が法律を手にして現れた時には、この法律とこの一派とを検証することが、立法議会議員としての私の権利です。あなたがたには、それを妨げることはできません。(すばらしい！) 続けます。

そうです、このシステム、この主義主張、この歴史とともに、教権擁護派は知っているのです、彼らが存在する至る所で、革命が勃発するということを。至るところで、トルケマダを避けるために、人々はロバスピエールの中に飛び込むのです。(センセーション) これこそが、カトリック党と称する党派を、重大な公共の危機となしているところのものなのです。そして私のように、諸国民のためにも同様に、無秩序な動乱と祭司的まどろみを恐れる人々は、警戒の声を上げるのです。まだ間に合ううちに、このことについてよくお考えください！(右派の席で非難の叫び声)

あなたがたは私の話を妨害しています。叫び声で喧騒で私の声が通りません。皆さん、私は扇動家としてではなく、誠実な人間としてお話しているのです！(聞きなさい！聞きなさい！) ああ、そのことですが、皆さん、ひょっとして私が疑わしい人間だとでもお思いでしょうか？

右派の席からの声—そうだ！そうだ！

ヴィクトル・ユゴー—なに！私が疑わしいと！そうおっしゃるのですか？

右派の席からの声—そうだ！そうだ！

(言語に絶するほどの騒然とした状態になる。演壇の上で落ち着き払った演説者にたいして、右派の一部の者達がたちあがり問いただす。)

ええ！この点に関しては、説明の必要があります。(静寂が戻る。) これはある意味では個人的な問題です。ご自分がなされた質問ですから、私の説明を聞いていただけるものと思います。ああ！私が疑わしいとは！一体、何によって？私が疑わしいとは！いいですか、昨年、私は危機にあった秩序を保守しました。今日は、脅かされている自由を守るのです！もし秩序を脅かす危険が再び訪れれば、明日は、秩序を守るでしょう。(ざわめきが起る。)

私が疑わしいとは！6月のバリケードの中で流血の惨事を防ぐために、私がパリの議員としての任務を全うしたときにも、わたしはあなたがたにとって疑わしい人物であったでしょうか？(左派の席でブラヴォーの声。右派の席で新たな非難の声。喧騒が再びはじまる。)

ええ！あなたがたは、自由を守ろうとする断固たる声にすら、耳を傾けようとしません。私があなたがたにとって疑わしいのであれば、あなたがたは私にとって疑わしいものです。私たちのうちで、どちらが正しいのかは祖国に判断していただきましょう！(すばらしい！すばらしい！—よく言った！よく言った！)

皆さん、最後に一言だけ申し上げます。私はひょっとしたら、秩序のために、この困難な時代の中で、記憶に新しい過去の中で、人目につくことのないなんらかの任務を果たす幸運に恵まれた者の一人なのかもしれません。人々は、その任務について忘れることができましたし、私はそれを思い出させはしません。しかし、私がお話している今この時、私はそれをよりどころとする権利があります。(いいや！いいや！—そうだ！そうだ！)

ええ、この過去をよりどころとして、私は、私の信念において、宣言しますが、フランスに必要であるもの、それは秩序です、しかしそれは、生きた秩序、すなわち進歩でなくてはなりません。その秩序とは、民衆の、当然の結果として起こる、平和的で、自然な成長から生まれるような秩序です。それは、現実の事象の中で、また同時に、思想の中でも、国家の知性の十全の輝きによって、できあがる秩序です。それはあなたがたの法律とは全く逆のものです。(左派の席で熱烈な賛同)

私は、この高貴なる祖国のために、抑圧ではなく自由を欲し、縮小ではなく継続的な成長を欲し、隷属ではなく力を欲し、虚無ではなく偉大さを欲する者の一人です！(左派の席でブラヴォーの声) 何ということでしょう！これが、あなたがたが私たちに提供しようとする法律ですか？なんと！政権担当者であり、立法議会議員である、そのあなたがたが、立ち止まりたいとは！フランスの歩みを止めたいとは！あなたがたは、人類の思想を石化し、神聖なる炎を消し、精神を物質化しようとしている！(そうだ！そうだ！—ちがうぞ！ちがうぞ！) ええ、あなたがたは、自分たちがいるこの時代の基本原理を見ていないのです！あなたがたは、つまり、あなたがたの世紀に、異邦人として存在しているのです！(深いセンセーション)

何ということでしょう！この世紀、変革、新しい時代の到来、発見、獲得に特徴づけられるこの偉大な世紀の中で、あなたがたは停滞を夢見ているのです！(いいぞ！) 希望の世紀の中で、あなたがたは絶望を主張する！(ブラヴォー！) 何とということでしょう！あなたがたは、栄光も、思想も、知性も、進歩も、未来も地に投げ出し、疲れきった労働者のように、こう言うのです。これで十分だ！これ以上は止めておいて、休もうじゃないか！(右派の席で否定の声) しかし、あなたがたは、あなたがたの周りで、頭上で、足の下で、すべてが行き来し、動き、成長し、姿形を変え、新しくなっているのを見ていないのです！

ああ！立ち止まりたいというのですね！なるほど！深い苦しみをもって繰り返しますが、カタストロフと崩壊を憎悪する私は、大変遺憾ながら警告いたしますが(右派の席で笑い)、あなたがたは進歩を望まないのですね？ならば革命が起こるでしょう！(深い動揺が起こる。) 愚かにも、「人類は先に進まない」という人間に対して、神は、震える大地を持って答えるのです！(左派の席で長い喝采)(演説者は、演壇から降りるとすぐに、彼を讃える大勢の議員に取り囲まれる。議会は激しい騒擾に包まれて終わる。)

おわりに

この演説の終盤、ユゴーが「私が疑わしい人間だとでもお思いでしょうか？」と呼びかける部分

があるが、これは当時のユゴーの政治的立場を端的にあらわしている。19世紀の前半、過激王党派詩人として文壇に登場したユゴーは、その後、徐々に自由主義的傾向を強め、1848年以降、とりわけ1849年をひとつの境として、共和主義思想へと向かっていったことが知られている。しかし、ユゴーが立法議会議員に当選した当時は、彼自身、保守派の票に支えられていたのであった。この演説は、右派による反動的な教育法案への反対演説であるから、保守派からすれば、ユゴーの主張は裏切りとして映ったはずである。もう一点、言い添えておくならば、演説の中で、ユゴーは左派から喝采を受けているが、そのことは必ずしも彼が共和派の政治家として認められていたことを意味しない。左派の中には、この後も、ユゴーがかつて王党派であり、貴族院議員であったことから、彼を自分たちの仲間とは認めようとしないうちが根強く存在しつづけることになる。亡命直前のユゴーは、一部の親しい人物たちをのぞいて、政治家としてはほとんど四面楚歌の状態にあったといえる。そうした状況下において、ユゴーは議会演説を、自らの思想を表明するひとつの場として選択していた。二人の息子と弟子たちが、1848年に『エヴェヌマン』紙を創刊していることから、ユゴーが新聞を非常に重要なメディアとして認識していたことがうかがえる。

教育をめぐる問題は、ユゴーにおいて、決して一時的な論戦の主題として終わったわけではない。亡命期間中、1862年に『レ・ミゼラブル』で成功を収めたユゴーは、1864年、『クロムウェル』の序文と並び立つ、もうひとつのロマン主義論とも言える『ウィリアム・シェイクスピア』を出版するのだが、その中ではふたたび、教育の問題が集中的に論じられることになるのである。宗教教育の自由を認める以前に達成されるべき課題として、国家による公教育の無償化・義務化を強く主張していたユゴーであったが、ナポレオン3世がその権力の基盤を強固なものとしていった当時、そうした思想が実現する見込みはほとんどなかった。『ウィリアム・シェイクスピア』において、公教育の重要性は引き続き明言されるのだが、そこでは新たに、芸術による教育という思想が一つの柱として展開されていくことになる。この著書で表明される「進歩のための芸術」という美学思想は、公教育の無償化・義務化という思想の挫折をひとつの踏み台としながら構築されていったものである可能性を探ることができるかもしれない。

参考文献

[ヴィクトル・ユゴーの作品]

Victor Hugo, *Œuvres complètes*, édition chronologique publiée sous la direction de Jean Massin, t. IX, 1968.

Victor Hugo, *Œuvres complètes*, vol. Critique, Robert Laffont, « Bouquins », 2002.

Victor Hugo, *Écrits politiques*, Anthologie établie, présentée et annotée par Franck Laurent, Librairie générale Française, « Livre de poche », 2001.

[先行研究]

宇野重規・伊達聖伸・高山裕二編著『社会統合と宗教的なもの—19世紀フランスの経験』、白水社、2011年。

宇野重規・伊達聖伸・高山裕二編著『共和国か宗教か、それとも』、白水社、2015年。

工藤庸子『近代ヨーロッパ宗教文化論—姦通小説・ナポレオン法典・政教分離』、東京大学出版会、2013年。

伊達聖伸著『ライシテ、道徳、宗教学—もうひとつの19世紀フランス宗教史』、勁草書房、2010年。

谷川稔『十字架と三色旗—もうひとつの近代フランス』、山川出版社、1997年。

Baubérot, Jean, *Histoire de la laïcité en France*, « Que sais-je ? », n° 3571, Paris, PUF, 2007. (三浦信孝・伊達聖伸訳『フランスにおける脱宗教性の歴史』、白水社、「文庫クセジュ」、2009年。)

Fizaine, Jean-Claude, « Journalisme et polémique religieuse au XIXe siècle : L'Univers et L'Événement », consultable sur le site du Groupe Hugo :

(http://groupugo.div.jussieu.fr/Groupugo/Textes_et_documents/Fizaine_L'intertexte%20biblique%20dansles%20romans%20de%20Hugo.pdf) , «Victor Hugo penseur de la laïcité : le clerc, le prêtre et le citoyen », Communication au Groupe Hugo du 9 novembre 2013: (<http://groupugo.div.jussieu.fr/groupugo/doc/13-11-09fizaine.pdf>) .

Guillemin, Henri, *Histoire des catholiques français au XIXe siècle (1815-1905)* , Utovie, 2003.

Hovasse, Jean-Marc, *Victor Hugo : I. Avant l'exil (1802-1851)* , Fayard, p. 2011.

Léon, Antoine, et Roche, Pierre, *Histoire de l'enseignement en France*, PUF, « Que sais-je ? », 1967.

Stein, Marieke, *Victor Hugo orateur politique : 1846-1880 « Un homme parlait au monde »*, Champion-Slatkine, 2007.

Guy Rosa, « "Lord Clown", ou comment Victor Hugo devient un orateur républicain », dans Christophe Charle, Jacqueline Lalouette, Michel Pigenet et Anne-Marie Sohn [dir.], *La France démocratique (combats, mentalités, symboles)* . *Hommages offerts à Maurice Agulhon*, Paris, Publications de la Sorbonne, 1998, p. 335-342. Consultable sur le site du Groupe Hugo : (http://groupugo.div.jussieu.fr/Groupugo/Textes_et_documents/Lord_Clown.pdf) .